

編集後記

この編集後記が載る頃にはそろそろ秋風がたち始めているだろうか。季節の移りかわりに敏感になり、秋の気配を寂しいと感じるようになるのも一種の加齢現象といえようか。編集委員として何年かが過ぎ、面白く勉強させて頂いているが、この仕事の中で肝に銘じていることがある。それは査読に際して、常に自らに傲慢な見方がないかと自省する必要がある、ということである。投稿の著者は多大な労力と時間をさいてまじめに原稿を仕上げ投稿していると思われるが、時に研究の目的や方法論に問題がある、あるいは文章が学術論文に相応しくない、誤字脱字が目にあまる、など厳しい判断を下されるものもある。委員会では少数の査読者だけでなく委員全員でこれらの評価を行うのであるから、極めて公正なものといえるが、個々の委員の判断基準に誤りや偏りがあってはならない。査読の意見によって論文がより質の高いものになるのを期待してコメントを著者に返す訳であるが、著者との意見の食い違いも当然起こることになる。むしろ最終的には著者の意見で論文が審査されるのであるが、査読意見が著者の主張を不必要にねじ曲げぬよう留意せねばならない。そのために査読者は自らの意見が妥当であるか謙虚に振り返った上でコメントすることが要求される。他人の書いたものに手を入れるということはそれだけ重いものであるということ意識しているつもりである。

しかし一方翻って問題を指摘された論文について見直してみると、著者の努力とは別に、十分推敲されているとは言い難いものも少なくない。言い換えれば指導者がチェックすべき初歩的な誤りを査読で指摘しなければならないというようなことである。多くの立派な指導者を擁しているはずの大学や国立病院からの投稿にも決して珍しくはない。指導者の目を十分に通っていないとすれば指導者の怠慢と言わざるをえない。教育職を離れてみると医学部教育や卒後医師教育の不十分さがいやでも目についてしまう。優れた研究者の育成が学会の activity を高め、ひいでは学会誌の質を高める基盤となるのは言うまでもない。

(秋本 伸)